

# 鹿児島県連合校長協会賞

## 小さな勇氣に大きな力

鹿児島県立鶴丸高等学校 二年

長谷川 詩乃



「……：どうしよう。鍵がない。」途端に早まる鼓動、脳内に鳴り響く警報音。目の前が真っ暗になっていくのを感じた。

それは新学期が始まって間もなくのこと。翌日に考査を控えていた私は、塾から帰宅する電車内で、今にもかじりつかんばかりの勢いで参考書に目を通していた。ダメだ。あんなに勉強したはずなのに、まだ全然頭に入っていない。集中しろ、自分。家に帰ったあとも頭に叩き込まねば。まずアレして、コレして、この時間を削って……。今にもパンクしそうな頭をフル稼働している矢先、聞こえてきたのは駅への停車を知らせるアナウンス。しまった、もう着いた。大慌てでリュックに参考書を詰め込み、駆け出すように電車を降りた。

駅の駐輪場へと歩き、リュックの中の自転車の鍵入れを手探りする。いつもなら、鍵の入ったフワフワの猫のポーチの感触を手に感じるはずだが、どれだけ探してもあるのは角ばった教材の感触。まさか。リュックを下ろし、目視する。予感的中した。何度も中を確認したが、無駄だった。「落としたんだ……。」きつと参考書を詰め込んだ時、中から転げ落ちたのだろう。慌てていて気づかなかった。どうしよう、落ち着け、どうしよう。すぐに携帯電話に手を伸ばし、震える手で乗車駅へと電話をかけた。走行中の電車に落とし物をした旨を伝えたが、曰わく走行中であるため、今すぐには確認ができない。確認できるのは、ここから何キロも離れた終点に着く、約一時間後であるとのこと。目眩がした。お札を述べ、電話を切ったが、私は今にも泣き出しそうだった。タラリと流れる汗一筋。あの中には、あのポーチの中には、家の鍵と自転車の鍵、計三本。もし盗まれたら。もし合鍵を量産されてしまったら。脳裏

をかすめる不安と恐怖。とめどなく湧き上がる感情を押し殺すので、私は精一杯だった。―どれぐらい時間が経つだろう。私は無意識に、携帯を耳に当てていた。発信先は、私の降車駅の二つ先の大きな駅。お願い、出て。相手を待つ。ガチャリ。繋がった。

「あの、猫のポーチの落とし物。届いていませんか。中に鍵が三本入っている。」藁にもすがる思いだった。すると、

「はい。ありますよ。うちで預かっています。」

心に広がった曇天に光が差しした。本当ですか、声が上がらず。興奮で息が荒くなる。考えるより先に、体が動いていた。受け取りに向かっていたのである。

到着した。窓口で迎えて下さったのは、二人の駅員の方。優しい目つきだった。ポーチのフワフワした感触を手に認めたとき、思わず力が抜けた。大きく息を吐き出す。心は温かな橙色。お札が、お札がしたい。届けてくれた方にお札がしたい。心からそう思った。だが駅員さんはゆっくり首を振った。名前は、わからないという。

この一件で、私の落とし物に対する意識は大きく変わった。今までの私は、道端の落とし物を目にしても、何かと理由をつけ、そっぽを向いていたのである。きつと誰かが。そう思う気持ちが少なからずあったのだろう。だが、落とし物を拾って届けるだけで、落とし主には計り知れないほどの安心感をもたらすことができる。とても素晴らしいことではないだろうか。「誰かが」ではなく、「私が」見えない誰かのための小さな勇氣が秘めた力の大きさに、改めて気づかされた。

もし叶うなら。私は、ポーチを届けてくださった方に、心から「ありがとう」を伝えたい。駅にポーチを届けてくださったこと、そして、毎日に忙殺される現代に生きる私たちが忘れがちな大切なことを、改めて呼び起こさせてくださったことに。

心にともった温かな灯火は、今も橙色にゆらめいている。

### 〔審査評〕

駅の駐輪場で鍵の入ったポーチを無くしたことに気がついた。作品の冒頭から読者の多くが、この緊迫した状況へ惹きつけられる。筆者の焦りと想像される最悪の事態に臨場感を感じずにはいられない。短い文章で自分の心模様を丁寧に表現することで、作文としての全体的な調和が生まれている。筆者の心には小さな親切の温かな灯火がゆらめいていることだろう。